忠臣蔵の裏表

第一回

講談師　一龍斎貞花

ナニッ　吉良が名君?と思われる方もございましょうが、日本の歴史の中で悪人と言われております平清盛。どうして源氏が正義で平家が悪なのか。

平家物語、吾妻鏡、源平盛衰記など源氏が天下の鎌倉時代に書かれたもので、源氏の時代にライバルのことをよく書くはずがありませんでそのため清盛は悪人。衣の下に鎧といいますが、武田信玄、上杉謙信、北条早雲はじめ入道した武将は少なくありません。

五代将軍徳川綱吉は、犬一匹殺しても死罪、ひどいといいますが江戸の町は夜灯りがなく、野犬が多く子どもがかみ殺されたり、大人も夜は危険だから出歩くなという所も少なくなかった。

それが野犬が犬小屋に収容されたので夜も安全な町になった。

世界の動物愛護団体はさかのぼって綱吉を表彰するべきと思いませんか。犬好きの方はそう思うでしょ。子どもが病気になってこんなに医療費払わされたというのに、犬が病気になると十万円でも平気に払う。知人にもいるんですが、そこで犬の保険も出来ました。

また、鎖国をしていたからいかんといいますが、鎖国していたお陰で悪い病気も、強い動物も魚も入ってこなかった。今や外国の強い動物や魚のために生態系も変わってしまっています。

コロンブスがアメリカ大陸に行かなかったならば、性病は流行しなかったわけで、物事は何事も表があれば裏があり一方から見るだけでなく、反対側からもぜひ見て頂きたいものです。

上杉謙信を先祖とする上杉家の富子姫は、大名の家に嫁げるにもかかわらず、美男子吉良左近を見初め一目見た時から心ときめかせ、

「私は吉良さんと結婚したい」と、わずか三千五百石の吉良家へ嫁いで参ります。

吉良家は、源義家を先祖に足利将軍家、今川副将軍家に何かあれば吉良家という名家で、高家（こうけ）といって殿上人を接待する作法の指南役をつとめるという家柄。上野介の娘たちも島津、津軽、酒井家という名門に嫁いでいます。八代持広は、家康の父広忠の元服に立会い烏帽子親となり、孫の義定と家康はいとこ同士という間柄。

忠臣蔵で悪役とされ憎々しい顔をしていますが本当は大変な美男子の上野介。富子姫と仲睦まじく長男三郎誕生。ところが富子の兄上杉家三代綱勝が急死。跡取りなき時は取りつぶしとなるため、そこで富子の子三郎が養子となり、三郎に男の子が生まれたら養子にして吉良家を継がせることにして、かくして三郎改め綱憲わずか三歳で上杉家藩主に就任。幼少のため父上野介が綱憲の後見役のような立場で上杉家を支えます。

「殿、また大嵐がやって来そうです」

「されば田畑が水浸しになるやもしれんな」

吉良の領地は度々水害に悩まされ、その度に田畑は水をかぶり大きな被害こうむっていた。

「急いで頑丈な堤防を築くのじゃ」

「堤防を築くとなれば日数が掛かります」

「なにを悠長なことを申しておる、なんとしても一晩で築くのじゃ。農民はい

うに及ばず武士も役人も総掛りでかかれば出来ぬことはあるまい。民のためじゃ」

かくして武士も農民も一丸となって工事に当り、長さ一八〇m、高さ四mの堤防が一晩で完成。一晩で築けるわけがない、講釈師いい加減なことを言うなと言われましょうが、古文書にそう書いてあります。

マ実際には一晩では無理でしょうが、短期間で出来上がったのは確かでありましょう。以後水害を防ぎ生産性も上がり黄金堤と書かれた碑が建てられ、今もって水害を防いでいるのです。

善政を行う殿様ですから領民の信頼も厚く、いつも赤馬に乗って領内巡視、農民たちは仕事の手を休め、頭を下げる。

「おう皆達者か、仕事の手を休めるでない、そのような挨拶は不要じゃ。どうじゃ今年の作物の出来は」

「大雨が降りましても、黄金堤のお陰で水に浸かることなく、毎年豊作でございます」

「そうかそうか、それはよかった。皆で造った堤防じゃ。身体に気をつけてな」

「有り難うございます」

〝吉良の殿様よいお方、赤いお馬の見廻りも浪士に討たれてそれからは、仕様がないではないかいな〟

ベストセラー「人生劇場」を書いた郷土の大作家尾崎士郎先生が作ったこの小唄、吉良の町のあちこちで唄われ、いつも乗っていた赤馬が郷土玩具になっています。

やがて成人した上杉綱憲に二人目の男の子が生まれるや、約束通り養子に迎えます。孫を養子にして倅にしたわけで、吉良家の跡継ぎ義周です。

富子も孫を我が子として慈しみ育てます。

富好新田と塩田

愛妻家の義央は、富子が重い眼病を患うや神仏に祈願をこめ、

「目を治して頂けましたならば、領民のため新田を開発します」

眼病が治るや約束通り新田を開発し、富子が好きと富好新田と名付けました。今もこの地名があります。

吉良の製塩は、富好新田九十八町八畝を開拓し、饗庭塩を作ったといわれ江戸や信州、岡崎などに送られた。

これに対し、赤穂の塩は白く上質で、作りかたを教えて欲しいと頼んだが、いい塩を作られ、赤穂の販路に影響するからと教えてくれない。そこで吉良家は赤穂へ七人送り込み製塩技術を覚え、帰ろうとしたが五人は捕らえられ、二人の産業スパイは帰国し、良質の白い塩が作られるようになったという。赤穂の塩は今も良質として有名ですが、吉良の塩は、江戸へわずかな食用のほか、信州の漬物、岡崎の八丁味噌用、主に原料として出荷。塩田の広さも吉良九十八町に対し、赤穂は三六〇町歩、いい塩の大企業と普通の塩の小企業では太刀打ちできません。ですから教えてもほとんど影響ないにもかかわらず教えなかった。経済戦争ですから仕方がないとも言えます。

幕府の仕事で京都に滞在中、江戸にいる十三歳の娘鶴姫に、

「頑張って仕事しているので、仕事が片付いたら帰るので、いろいろお話ししましょう」

という手紙が残されており、平仮名を多用し優しい語り口調で書かれており、優しいお父さんです。

浅野家は、正保二年七月（一六四五）関東の笠間から、播州（兵庫県）赤穂へ祖父長直の代に転封になり、赤穂の塩田は、遠く奈良期といわれるものの大規模なものでなく、本格的塩田開拓に着手。当時は一国に一城であったが、赤穂には城が許され、築城工事の費用国造りに財政苦しく本家芸州浅野家へ借財を申し込んだほどで、年貢を6割取り立てていた。この時の領民の苦しみが、後年内匠頭の殿中刃傷から浅野家取り潰しとなった時、ある村では快哉を叫び餅や赤飯を村中に配ったという。これは酷税に反対する一揆があり投獄されていた指導者が、領主交代によって釈放される喜びからであったともいわれ、神田上水より37年も前の元和二年家康死去の年に赤穂五千人の城下各家庭に上水道が引かれていたという説も。各家庭にというのは世界初ともいえる裕福であったといえるもので、その後苦しくなったのかもしれないが、伝えられる歴史の差違不思議なところ。

殿中刃傷に及ぶ付け届けや、上野介と内匠頭の遺恨、裏話もまじえ次回連続に申し上げます。